

# コミュニケーションとしての音楽

—異文化間を結びつける役割の考察—

教科教育専攻 音楽教育専修

98PM36 塩田 英樹

## 1. 論文の構成

### 第Ⅰ章 コミュニケーションと現代

- I-1. 国際関係に見るわが国の現状
- I-2. 交流が不足している現代
- I-3. 人と人がつながることによる利点

### 第Ⅱ章 非言語コミュニケーションについて

- II-1. コミュニケーションとは
- II-2. 非言語コミュニケーションの概念、および特徴
- II-3. 音でコミュニケーションできる可能性

### 第Ⅲ章 コミュニケーションとしての音楽の特徴

- III-1. 音楽を構成する要素
- III-2. 音楽で伝えられるものとは
- III-3. 人々の心を動かす音楽

### 第Ⅳ章 異文化と交流を進めるための視点

- IV-1. 異文化を理解するために
- IV-2. 違いの中にある共通性
- IV-3. 違いからの学習
- IV-4. 新たな文化の創出

### 第Ⅴ章 まとめと考察

- V-1. 交流を進めていくための留意点
- V-2. 音楽をコミュニケーションに役立てる

## 2. 論文の要旨

今日わが国ではコミュニケーションを図ることが重要になってきている。その重要性は充分意識されつつあるが、その具体的なコミュニケーションのあり方には今だ不明な点が多い。われわれが学んできた音楽の役割を考えると、「音楽には人々を結びつけるコミュニケーションとしての役割があるのではないだろうか」ということに筆者は気づいた。そこでこの論文では、コミュニケーションを図るうえでの音楽の特徴について分析し、異文化との交流を図るという点ではどのような役割を果たしているのかについて考察していく。

現在、海外との交流が進み異文化をもつ人々と出会う機会が増えている。しかし、同質性を好むという特徴をもつわれわれ日本人の間ではまた、違ったものを排除しようとする傾向があり、近隣の文化についても十分理解されているとは思えない。日本国内においてもさまざまな文化をもつ人々がいるが、人と人とのつながりや交流は希薄になってきている。まわりの人とつながりを深めることは、生きる力を養っていくうえでの原動力になり大変重要であると考えます。

「コミュニケーション」という言葉は、人間関係成立の基盤としてとらえることができる。われわれは他人と言葉でいろいろなことをやりとりしている一方、言葉であらわせない

い非言語コミュニケーションも普段から活用しているが、そこには言葉に表わせない本音も表れることがある。異文化とのコミュニケーションを図っていく際には、いろいろな面から対象を判断し、自分の価値観や思考の枠を超えて共有していくことが望まれる。

音の刺激には人類に共通する感覚があるようだが、言葉をつかわない自然界でも音を使ったコミュニケーションがある。声をつかう人類は、生命活動の表れとして心の中に抱えている感情を表現し、「音」にいろいろな意味をつけて活用してきた。そして、適切な「音」という素材を選ぶ過程で価値を見出し「音楽」が成立した。

ここで、コミュニケーションの媒体としての観点から、音楽を構成している<リズム><音の高低><和音>について考察したが、そこには、これら人間に共通して感じられる要素があることがわかった。

- ・リズム……人間の感覚に直接作用し生きている時間の感覚を認識できる。
- ・音の高低…人間の感情などの表現を表わす。
- ・和音……動きの変化を期待し、音楽上の工夫を見分ける。

また、音楽で「何が伝えられるのか」ということについては、一般のコミュニケーションで起こる伝達の過程（正確な情報を送る）とは違い、聴衆が『作品』という媒体を通してその洞察を共有しながらも、自分の創造力を働かせて自由な感覚でとらえることができる、という考察をした。

さらに、音楽には感情が表現され、それを鑑賞しているものがその“感情の本質”を共有することで心が揺り動かされることがある。その結果、人の心を解放し、人々の心を結び付け、思い出となって忘れかけていた時を思い起こさせたり、今聴いている空間が変わって感じられる可能性も秘めている。そして、集団としての存在を確認させたりする力をもっていることで、音楽が言葉では表現しえない考えや観念を放出させる機会をつくり出し、社会を動かすまでの力をもっているということを確認した。

異文化と交流をしていくためには、いろいろな人から影響を受け、自分の考えや文化、価値観を広げ、膨らませていく、つまり「互いに学びあう」という姿勢が必要である。異文化の中に共通点を見出すことで共通の話題が出て親近感がわいたり、異なる立場から学ぶことによってそれまで見えなかったものが見えてきたりして、文化は発展してきている。文化の違いをプラスの方向に活かしていくことが、異文化間でのコミュニケーションを図る上では肝要である。また、実際の音楽に触れたり、その音楽が作りだされた背景を知ったり、粘り強く交流を進めていくことが大切である。

L. パントは「音楽的相互作用をとおして、二人の存在はそれぞれの部分の総和以上のものを創造する。そしてその二人は、日常の社会的交流では起こらないような共感を自らの力で経験する」と述べている。国連は本年を「平和の文化のための国際年」と定めている。人の心に直接届く“音楽”という芸術文化をコミュニケーションの中で活用していくことによって、音楽での交流の中で得た共感を土台にして、異文化の人たちと深い心のつながりを結んでいくことが、社会のよりよい形成に役立っていくこととなるであろう。